

◇ 国 語

国 8-1～国 8-16 まで 16 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

科学には常に進歩、発展というイメージがつきまとう。誤りを内包した旧説が、それを正した新説に取って代わられるという基本的な枠組みの交替をつげながら、科学はその歴史を刻んできたと言述されがちである。

「コペルニクスの転回」と表現される天動説から地動説への切り替えは、そうした科学の側面を **ア** に表す出来事であろう。そして、地動説という新しい宇宙観を基盤にして一七世紀後半、近代科学の最初の理論体系となるニュートン力学が確立されるわけである。それは思弁的な論理のつなぎ合わせの域を出なかったアリストテレスの運動論を根底からひっくり返す、数理化された演繹能力の^{えんえき}高い知の **あ** であった。

また、古代、中世から連綿と試みられてきた錬金術が一八世紀末、定量的で精密な実験によって否定され、新しい物質観にイキ^イヨした近代科学が誕生することになる。このとき、現代につながる元素の概念が構築されるに至ったわけである。

錬金術と並んで人間が長い間、その実現に向け夢を追いつづけてきたものに永久機関がある。永久に作動し、仕事をしてくれる、「濡れ手に粟」の機械である。しかし、一九世紀半ばに完成された熱力学によってこれもまた、葬り去られる **い** をたどることになる。こうして、科学の進歩は錬金術、永久機関という一攫千金^{かく}を当て込んだ人々の企てを打ち砕いたのである。

熱力学がその存在を否定したもうひとつに、「カロリック」（熱素）と呼ばれた不可秤^{ひょうりょう}量物質（重さのない仮想粒子）がある。一九世紀に入るまで、熱はこのカロリックの流れによるとみなされ、現象論的にはそれでうまく説明がつけられていた。ところが、エネルギーという新しい物理量の導入により、熱は物質を構成する粒子の運動に帰着されることになる。その結果、不可秤量物質は科学の **う** から姿を消したのである。

さて、一九世紀半ばには生物学の分野でも大きなヘンカク^{ヘンカク}が訪れた。一八五九年、ダーウィンが『種の起源』を著し、自然選択説にもとづく進化論を世に問うたのである。それは世界周航を通して行われた多種多様な生物の観察と膨大な数に及ぶ標本の収集から導き出された学説であり、神を生物の創造主とするキリスト教の自然観に対し **い** 証拠（観察記録や標本）を提示して、その **え** を試みるものであった。

同じころ（一八六〇年）、パスツールが当時、定説とみなされていた生命の自然発生説を否定する実験を報告している。生物

にはいずれも親がいる。ところが、微生物（バクテリアやカビなど）は腐敗した物質（非生命体）から生まれてくると、一九世紀には考えられていた。パスツールは肉汁を特殊な形をした首のついたフラスコに詰めて煮沸し、外からほこりなどが入り込まないよう工夫すると、肉汁は腐らない、つまり微生物は発生しないことを証明した。そして、フラスコの首を取りはずすと、腐敗はすぐに進行した。肉汁を腐らす微生物は物質から自然に発生するのではなく、彼らにもちゃんと親がいたのである。

自然界に存在する実体を大別する方法として、生命と物質という分類の仕方があるが、ある時代まで自然発生説という捉え方で両者には接点が設けられていた。これに対し、パスツールは両者のリンクを切断したわけである。この実験は生命観に大きな転換をもたらすものとなった。

以上、旧説から新説へと移行する科学史上の事例をいくつかあげてきたが、なかでも二〇世紀のはじめ、アインシュタインによる相対性理論の提唱は「革命」と形容するにふさわしい出来事であった。二〇〇年以上、科学のキハんとみなされてきたニュートン力学に修正を迫り、時間・空間の概念を根底から覆す理論が生まれたからである。そして、この理論によっても物理学の世界からついに追放されるはめになったものがある。

それは宇宙空間に充滿し、光（電磁波）を伝播させる媒質として想定されていたエーテルである。そのルーツは天動説にまで遡ることを考えると、古代ギリシャの自然観は **ウ** にアインシュタインによって **エ** に引導を渡されたと表現できる。

このように、科学の進歩、発展は、ある時代まで常識としてまかり通っていた学説が新説に置き換えられるという転換の連続として捉えられることが多い。確かに科学の潮流を **エ** に眺めれば、そのように要約しても間違いはなからう。

しかし、だからといって、事はそれほど単純ではない。捨て去られたものにあらためて注目してみると、そこから現代科学につながる歴史の異なる相貌が浮かんでくるからである。

地動説の登場により、地球は宇宙の中心に位置し、絶対静止をしているという地位を太陽に明け渡した。ところが、やがて太陽もまた、その特権的な地位をホウキさせられることになる。宇宙には絶対静止の中心などないことが相対性理論の **お** として導き出されたからである。太陽は惑星の運動を記述するさいの **オ** な原点に過ぎなかったのである。もちろん、これによって、天動説そのものが息を吹き返したわけではないが、空間の絶対性を否定する視点で見れば、地動説も所詮

は宇宙に設定する任意の座標系のひとつにすぎなくなる。

錬金術は化学反応の操作では不可能であることが証明されたが、二〇世紀に放射性元素の研究が進み、原子核の存在が突き止められると、元素の変換は起きることが明らかにされた。装いを新たに「錬金術」は夢から現実へとなっている。

では、熱現象を説明するカロリックに付与された不可秤量物質なる概念はどうなったであろうか。これはまさに、光（電磁波）を粒子とみなした光子がそれに対応する。光子はエネルギーをもつ歴とした実体であるにもかかわらず、仮想されたカロリックと同様、質量は0である。また、現代の素粒子論に従えば、誕生直後の宇宙ではすべての粒子は質量がなく、光速で飛びまわっていたと考えられている。そこは不可秤量物質が充滿する世界であった。ところが、ヒッグス場の発生によって光子以外の粒子は質量をもつようになったというわけである。

自然発生説も一度は否定されながら、今日、あらたな展開をみせている。DNAの二重らせん構造がX線を用いた物理学の実験によって解明されたことに象徴されるように、二〇世紀も後半に入ると、生命現象は物質科学の一分野に取り込まれるようになってきた。そして、太古の地球で複雑な有機高分子から成る物質がなんらかの化学、物理学反応によって原始生命が創られたと考えられている。そのメカニズムはまだ謎に包まれているものの、最初の生命体は親からではなく物質から生まれたことになる。

こうして、生命の自然発生説は物質科学とリンクしながら復活してきたわけである。

似たようなことが、エーテルについてもいえる。二〇一一年のノーベル物理学賞は宇宙の膨張が加速している現象を観測した三人の科学者に贈られた。そこから、空間を押し広げる未知のエネルギー（それは暗黒エネルギーと呼ばれている）が宇宙全体にわたって均一に分布していると考えられるようになった。

かつて想定されていたエーテルと担う役割は異なるものの、宇宙には正体不明の「何か」が充ちているという観点で捉えれば、暗黒エネルギーは二一世紀のエーテルに相当する。さらに話を敷衍すれば、エーテルも暗黒エネルギーも「空虚」（真に空っぽの空間）の否定につながるわけであるが、その源流は空虚の存在を不可能としたアリストテレスの自然学に行きつくことになる。ところで、かつては宇宙は静的で安定なものと思われてきた。ところが、ハッブルの法則の発見や宇宙背景放射の観測など

により、今日ではビッグバン宇宙論が定説となっている。宇宙はいまもお膨張をつづける動的な振る舞いを示しているわけである。加えて、暗黒エネルギーの作用により、膨張が加速しているという証拠が観測されたとなると、この運動は永久につづくのか否かという疑問が生じてくる。同時に、膨張を活発化させる暗黒エネルギーの源泉の解明も重要な課題になる。

ここで思い浮かぶのが、永久機関である。宇宙は人間が造った機械ではもちろんない。ではないが、ひとつの閉じた系システムとみなすことは可能であろう。その場合、膨張がいつまでもつづくとなれば、宇宙という系は「永久機関」であり、それを記述するには、熱力学を超えた新しい物理学が必要になってくるかもしれない。

このように歴史をたどってみると、科学は旧説が新説に取って代わられることによって一直線に進歩してきたと単純には捉えられないことがわかる。例示したように、錬金術が放射性元素の変換へ、不可秤量物質の概念が光子の描像へ、自然発生説が生命科学と物質科学のユウゴウEへ、エーテルによる空虚の否定が暗黒エネルギーへと、いう具合に変貌へんぼうを遂げながらも、その対象に込めた思想や関心はいまも科学の中で息づいている。

そう考えると、近代に入ってから科学が著しい発展を遂げたことは言を俟たないが、人が自然を眺める基本的な姿勢や知りた
いと思う謎の本質は存外、変わってはいないといえる。

(小山慶太『へどんでん返し』の科学史』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A イキョ

- ①イワカンを抱く
- ②休日をもイに過ごす
- ③心労をイブする
- ④原稿の執筆をイライする
- ⑤イタンの考え

1

B ヘンカク

- ①トウカクをあらわす
- ②エビはコウカク類だ
- ③カクシキを重んじる
- ④メイカクな答え
- ⑤人工ヒカクのカバン

2

C キハン

- ①セイキの社員
- ②徴兵をキヒする
- ③ケツキの集会
- ④平和をキキユウする
- ⑤ジヨウキを逸する

3

D ホウキ

- ①勤労ホウシ
- ②ホウタンな行動
- ③病人をカイホウする
- ④クウホウを鳴らす
- ⑤外国語をホウヤクする

4

E ユウゴウ

- ①ユウゼンとした態度
- ②ユウキョウに耽る
- ③ユウグウ措置
- ④お金をユウシする
- ⑤貯金をカンユウする

5

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①表象的 ②具体的 ③象徴的 ④実現的 ⑤一方的 6

イ ①一面的 ②横断的 ③意欲的 ④客観的 ⑤主観的 7

ウ ①最終的 ②個人的 ③強制的 ④感情的 ⑤計画的 8

エ ①画期的 ②効率的 ③大局的 ④求心的 ⑤実証的 9

オ ①宿命的 ②便宜的 ③事務的 ④神秘的 ⑤電撃的 10

問三 空欄 あ・い・う・え・お に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

あ ①玩具 ②防具 ③敬具 ④道具 ⑤建具 11

い ①原因 ②運命 ③結果 ④順路 ⑤悲運 12

う ①晴れ舞台 ②裏舞台 ③回り舞台 ④影舞台 ⑤表舞台 13

え

①反映

②反証

③反転

④反目

⑤反問

14

お

①帰結

②結願

③帰路

④完結

⑤帰属

15

問四 傍線部(a)・(b)・(c)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

(a) 一攫千金

①一つの出来事が大きな評価を得ること

②一元的に作業することで効率上がること

16

③一時にたやすく莫大な利益を手に入れること

④一つの言葉が大きな価値をもつこと

(b) 引導を渡された

①解雇を通知されること

②人々を仏道に引き入れること

17

③悪い結果をつきつけられること

④終わりを宣告されること

(c) 言を俟たない

①言うまでもないこと

②言っではいけないこと

18

③言葉を失うこと

④言葉を持たないこと

問五 傍線部(一)「捨て去られたものにあらためて注目してみると、そこから現代科学につながる歴史の異なる相貌が浮かんでくるからである」と筆者が記す「あらためて注目する捨て去られたもの」に当てはまるものは何か。次の①～⑧の中から二つ選ぶ。

19

20

- ① 不可秤量物質
- ② 永久機関
- ③ 進化論
- ④ 相対性理論
- ⑤ 自然発生説
- ⑥ 有機高分子
- ⑦ 熱力学
- ⑧ 暗黒エネルギー

問六 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

21

- ① 科学の進歩、発展は、ある時代まで常識としてまかり通っていた学説が新説に置き換えられるという転換の連続である。
- ② 世の中には科学の理論では計り知れない精神世界があり、ある日突然に変異する事柄が存在する。
- ③ 生命現象は物質科学と無縁であり、最初の生命は物質からではなく、すべて親から生まれてくるのである。
- ④ 新説の登場で旧説が否定されることによって、科学が一直線に進歩してきたとは単純に捉えられない。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一八九四年六月二三日—こんにちオリンピック・デーとして記念されるこの日。クーベルタン男爵の提唱に従い、各国の代表者たちが一堂にカイしたパリ国際スポーツ会議は、満場一致でオリンピック競技の復活を宣言した。近代オリンピック誕生の瞬間である。

古代オリンピックの精神を、時を超えてよみがえらせようとするクーベルタンのそれまでの道程は、けっして平坦なものとは言えなかった。スポーツによる国際親善という彼の理想に対する無知や無理解、各競技団体間の反目、普仏戦争後の独仏国民感情の対立などが、彼の行く手をいくえにも阻んだ。そもそもこのパリ会議にしても、当初の目的はアマチュア規定問題について各国の合意を得ることであって、オリンピック復活は付随的な議題にとどまるはずだった。

こうした不利な状況を会議直前に逆転させ、会議の正式名称もいつのまにか「オリンピック復興会議」に変更し、結果的には第一回アテネ大会の二年後における開催、以後四年に一度の大会挙行、そして国際オリンピック委員会（IOC）の設立といった歴史的な決議を、熱狂的な会議の興奮の中で一気に成立へと導いたクーベルタンの手腕は、魔術師的とさえ言える。

古代オリンピック復活というアイデアを実行に移したのは、クーベルタンが最初ではない。すでに一八世紀末から、フランス、イギリス、ドイツ、ギリシャなどで、古代オリンピック復興大会なるものが何度も開かれていた。しかしそれらがいずれもローカルな規模の、ときには見せ物的な興行に終わったのに対し、クーベルタンだけが成功を収めたのは、なぜか。もとより、人心収攬の妙を心得た人格的魅力、抜群の組織力と行動力、国際的な人脈、いかなる逆境も自分に都合よく解釈する **ア** 主義、といった彼のシシツもおおいに関係していたことだろう。だが彼の能力は、それにとどまるものではなかった。

近代オリンピックの成立とクーベルタンの生涯については、人類学者ジョン・J・マカールのきわめてセイチな実証研究がある。本節の記述もこれによるところが少なくないが、それによれば、クーベルタンはある種の旗印を利用して人々を動かすこと、つまりシンボル操作の才能にひいでていたという。パリ会議で彼が最大限に利用したのは古代ギリシャの強烈なシンボル性であった。

(中略)

結局、クーベルタンの言う古代オリンピック精神なるものは、基本的に近代の創造によるものであった。注目すべきは、近代オリンピックは古代ギリシャ精神で貫かれねばならぬと主張したクーベルタンの思想にも、キリスト教的要素がひそかに紛れ込んでいることである。彼がスポーツによる人格教育の目標を「筋骨たくましくキリスト教徒」の育成におき、その手段としてのスポーツ競技を「キリスト教的運動競技」と意義づけていたことは重要である。

また、彼は、オリンピック思想におけるスポーツマンシップを説明する中で、騎士道精神という語をしばしば用いる。騎士道精神とは、競い合う者同士の友情であり、たがいに助けの手をさしのべる心であり、また、熱き対抗心でもある。その騎士道精神こそ、古代オリンピック精神の「イ」だった、と言う。

ここには、中世以来のキリスト教的騎士道精神と古代のオリンピック精神が、奇妙な形で結びあわされている。当然ながらこのような論理は、どれほど矛盾をはらんでいようと、古典古代とならんでキリスト教を重要な精神的支柱とする欧米知識人にとって、耳に心地よく、安心して聞けるものだった。

つまり、近代オリンピックが礼賛してやまなかつた古代ギリシャ人像とは、近代西欧人にとつてあるべき自画像の逆投影であった。本当の古代ギリシャ人は、彼らとは本質的に異質な「ウ」である。オリンピック精神とは、一五〇〇年の眠りから覚めて近代に甦生したというものではない。それは古代の神話化を通じて、近代西欧によって新たに創造されたものなのだ。それならば、古代オリンピックと近代オリンピックとの間には、何の連続性もないのだろうか。けっしてそうではない。「われわれはギリシャ人である」という近代西欧人の自意識が誤りだとしても、オリンピックが何者かを古代ギリシャ人から受け継いでいることは否定できない。同一性と連続性とは、別のものだからである。

商業主義・ドーピング・贈収賄・国際政治の干渉などのいわゆる暗黒面に辟易しながら、それでもオリンピックが近づいてくると、きまって心騒ぐものを感じだすのはなぜだろう。開会式がテレビで放映されると、数々のアトラクションに目をこらし、自国選手団入場に声援を送り、オリンピック賛歌の演奏と聖火の点灯に胸を熱くする。普段とはちがうハレの時間が、ここから始まる。それまで見たこともなかった特殊で地味な競技にさえ、カンセイを上げる。全世界の人々とこの気分をともにしているという思いが、なおのこと興奮を高める。そして大会が終われば、かならずにがしかの喪失感を味わう。フェアプレーやスポ

―ツマンシップなら、毎年行われる世界選手権大会でも目にするにはできよう。だが、そこにはオリンピックだけが持つこのような興奮がない。

人々を異常なまでの熱狂に誘うオリンピックの魅力とは何か。マカールンによれば、それは、遊戯、儀式、祝祭そしてスペクタクルという四つの要素の結合だという。言いかえれば、競うこと、聖化すること、楽しむこと、驚嘆することがオリンピックの魅力の本質である。だとすれば、これらの要素どれもが、何らかの形で古代オリンピックにも存在したことは明らかだろう。それはまずゼウス様に捧げる宗教儀礼であり、選手が競争の原理によつて競い合う場であり、また見せ物としてのスペクタクルであり、なにより多くの人々が楽しむ祝祭であった。そこでは価値が逆転し、日常的な秩序が力を持たなくなる。アテネが大国の力を背景に八百長に科せられた罰金の支払いを拒もうとしても、オリンピックという聖なる時空間では、そのような世俗的権力関係は通用しなかったのだ。

もし古代オリンピックの何かが近代に再生したとすれば、それはこのような エ の魅力ではないだろうか。そしてこの魅力は、個人間の、そしてそれ以上にポリス（古代ギリシャの都市）間の競争というものに対する他に類例がないほどの執着を、ポリスの枠を超えて広がるゼウス神への信仰とたくみに組みあわせた、ギリシャ人の獨創性から生まれたと言えよう。

現代のオリンピックが抱えるさまざまな問題を目の当たりにしたら、泉下のクーベルタンは頭を抱えるにちがいない。彼が理想とした古代の高貴なアマチュアリズムなるものは、残念ながら商業主義の力に圧倒されつつある。しかし、単純な古代の理想視は、かえってオリンピックの生命の本質を見失わせる。ときに精神の喪失、腐敗の横行と非難されることがあっても、かえって古代オリンピックの結果としてローマ帝政末期まで生きぬいたことを思うと、近代オリンピックの生命力にも、存外強靱なものがあるのかもしれない。

（橋場弦『古代オリンピック』所収の文による）

問一 傍線部A・B・C・Dと同じ漢字を含むものを、次の①～⑤の各群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A カイ|した

- ① 方程式の|カイ
- ③ |カイを開く
- ⑤ 堤防を|カイシユウする

- ② 古代への|カイキ
- ④ |ホンカイをとげる

2 2

B シ|シツ

- ① 画壇のシ|ホウ
- ③ シ|カクの取得
- ⑤ シ|フンをぶちまける

- ② シ|アンに余る
- ④ シ|ユウを決する

2 3

C セイ|チ

- ① チ|セツな文章
- ③ フウ|チを損なう
- ⑤ 傷がチ|ユする

- ② チ|ミツな計画
- ④ グ|チを言う

2 4

D カン|セイ

- ① カン|キがゆるむ
- ④ 注意をカン|キする
- ⑤ 部屋をカン|キする

- ② カン|キをこうむる
- ④ カン|キして躍り上がる

2 5

問二 傍線部 (a) 「阻んだ」のヨミとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

(a) 阻んだ

① こばんだ

② そねんだ

③ いなんだ

④ はばんだ

⑤ やつかんだ

26

問三 空欄

ア

イ

ウ

エ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

① 利己

② 楽観

③ ご都合

④ 場当たり

27

イ

① 模倣

② 妄想

③ 擬態

④ 精髓

28

ウ

① 自我

② 偶像

③ 他者

④ 遺伝子

29

エ

① 祝祭

② 宗教儀礼

③ 非日常性

④ 競い合う場

30

問四 傍線部（二）「人心収攬の妙を心得た人格的魅力」とあるが、クーベルタンをどのような人物だといえるのか、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

31

- ① 熱意と誠意によって人を動かす力を会得している気品あふれた魅力を持つ紳士的な人物であることをいう。
- ② 不思議なほど人の心をとらえることに精通しているすぐれた人柄を持つ魅力的な人物であることをいう。
- ③ 魅力的な人柄によって、人の心を感じさせ自らの理想に協力してもらおう術にたけている人物であることをいう。
- ④ 人の心を感じさせかき乱すことによって、自らの目標を達成する方法を心得つつも、上品さを失わない魅力的な人物であることをいう。

問五 傍線部（二）「シンボル操作の才能にひいでていた」とあるが、例えば、クーベルタンのどのような手法や才能を指しているのか、その具体例として考えられる最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

32

- ① 本来の古代オリンピックには存在しなかった「マラソン」という勝敗が誰の目にも明らかなき種目を、近代に復活させたオリンピックの代表種目としたことなど、何が人々を熱狂させるかを洞察する才能。
- ② クーベルタンは、教育学者としてスポーツによる人格教育を目指しており、そのためにオリンピックを復活させて世界的なスポーツの振興を図ったように、目的のために壮大なイベントを企画する才能。
- ③ 西欧諸国にオリンピックの復活を納得させるために、古代ギリシャのオリンピック精神を「キリスト教的運動競技」として定義するなどの、理論的な根拠にもとづいて計画を実行する手法。
- ④ 国際会議の前に、周到に準備された古代ギリシャの音楽を再現・演奏するというアトラクションによって、人々の心に古代ギリシャへのイメージを鮮明に印象付け、オリンピックの復活への賛同を得るといふ手法。

問六 傍線部(三)「近代オリンピズムが礼賛してやまなかった古代ギリシャ人像とは、近代西欧人にとってあるべき自画像の逆投影であった」の具体的な説明として、最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

33

①クーベルタンをはじめとする近代西欧人たちにとって、古代ギリシャ人は過去の人々ではあるが、むしろ時代を逆行して、未来のキリスト教徒たちが理想とする人物像であったと考えられていたのである。

②近代のオリンピクの復活に際して、人々が礼賛した古代ギリシャ人の真実の姿は、実は、近代西欧人たちがめざしていたキリスト教的な理想像・人物像とは、真逆の姿なのである。

③近代に復活したオリンピクにおいて、古代ギリシャ人のオリンピク精神・スポーツマンシップが理想とされたが、それは、西欧人が中世以来、精神的支柱としてきたキリスト教的騎士道精神と結びつけられて創造されたものである。

④近代のオリンピク復活時に、古代ギリシャ人が一躍脚光をあげたのは、古代においてすでにスポーツによって人格形成を行っていた点にあり、そのことは近代西欧人たちが理想とする自画像に近いのである。

問七 傍線部(四)「辟易しながら」の意味として最も適当なものを、①～④の中から一つ選べ。

34

①恐れおののきながら

②驚き失望しながら

③冷めた気持ちを抱きながら

④うんざりして閉口しながら

問八 傍線部(五)「なにがしかの」は、どのような場合に用いる表現か、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 実際は人それぞれに違うものを一括して言うのに用いる。
- ② あまり多くない不定の程度について漠然と言うのに用いる。
- ③ 誰のことか人名を列挙せず不特定多数の人について言うのに用いる。
- ④ 具体的な状況については不明である事を指して言うのに用いる。

35

問九 傍線部(六)「泉下のクーベルタンは頭を抱えるにちがいない」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 仕事の煩雑さを逃れるためにクーベルタンが泉のほとりに居住していたことに喩えて、どのような自然も彼を癒すことは出来ないだろうという。
- ② 泉が湧き出るように発想が豊かだったクーベルタンでも、現代のオリンピックが抱える多くの難問を解決することはできないに違いないという。
- ③ 死後の世界にいるクーベルタンも、現代のオリンピックが直面する諸問題をどうしたらよいかわからないだろうという。
- ④ 理想に燃えてオリンピックを復活させたクーベルタンが生きていたならば、現代のオリンピックの難題を考えぬいて解決に導くに違いないという。

36